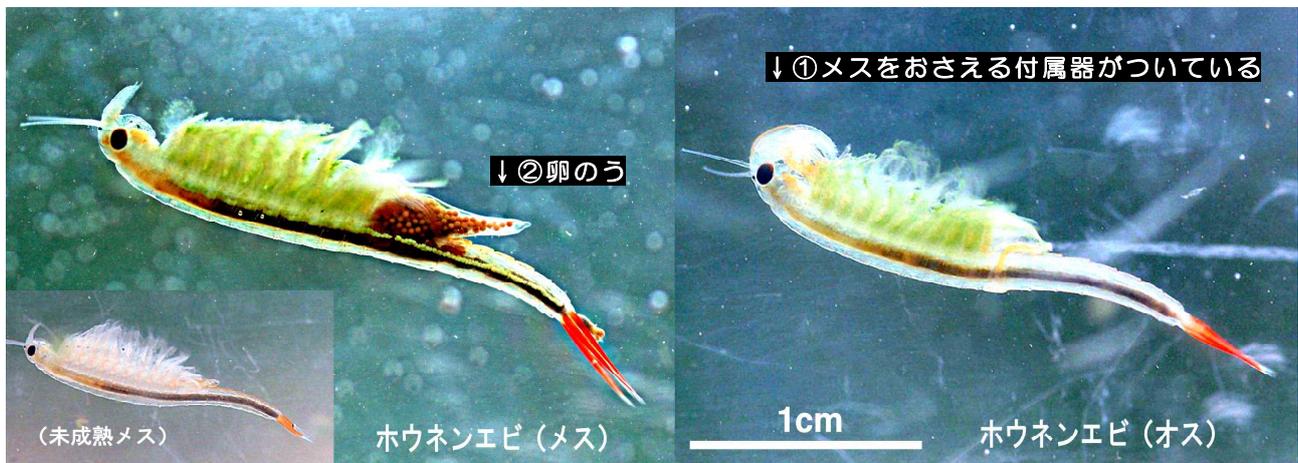


田んぼの妖精・ホウネンエビ



「何ですかこれ?」「エビフライが泳いでる」「色が変」「気持ち悪い」…逆さまになって泳ぎ回るホウネンエビを初めて見た人の感想である。この名前は、江戸時代、天保年間の豊作の年に金魚屋が売りに来たことから名前がつけられたといわれている。一方、ホウネンエビの英語の呼び名「フェアリーシュリンプ」は、「妖精のような小さなエビ」という意味である。となると、本種のキャッチフレーズは「田んぼの妖精・ホウネンエビ」で決まりだろう。しかし、「妖精みたい」という言葉は、残念ながら、いまだ耳にしたことがない。

ホウネンエビは、甲殻類ではあるが甲殻（固い外皮）を持たない無甲目のホウネンエビ科というグループに属しており、エビよりも**ミジンコに近い仲間**である。オスの頭部には交尾の時にメスをおさえる付属器がある（①）ので、はっきり雄雌の区別がつくのが特徴である。また、メスは成熟すると卵のう（②）が発達する。田んぼに水が入ると、それまで土の中で耐えていた卵が孵化し、1週間ほどで本種の幼生が出現する。短期間に体長2～3センチ程度まで成長するが、田んぼの水が無くなる頃には、乾燥に耐える卵（耐久卵）を残し姿を消してしまう。ほんの1ヶ月程度の命なのである。



< 採集した水田 >

ところで、ホウネンエビ、**最近かなり有名である**。6月11日付けの下野新聞、13日夕方放送のニュース番組（「森田さんのお天気ですか」のコーナー）で、ともに鹿沼市内の水田での大発生を紹介している。これがニュースとなったのは、a ホウネンエビは、どの田んぼでも発生するわけではないので珍しいこと、b 県内では県南部でしか発生が確認されていなかったので、鹿沼市で初めて見た人の驚きが伝わったこと、c 季節性があり人間や稲作には害がない微笑ましい話題であったこと、などが考えられる。

これらの報道の中で、特にインパクトがあったのは、テレビ取材を受けていた鹿沼自然観察会の会長さんは、実際に「ホウネンエビ」を食べてみており、「**ちょっと甘くてワリといけるかも**…」とコメントされていたことである。

新しい食料源として注目されることは、まずないだろうが、「ホウネンエビ」の研究史に「ちょっと甘くてワリといけるかも」という食感が加わったことは、意外に大きな一歩ではなかったかと思っている。



< H20.6.13 TBSテレビより >